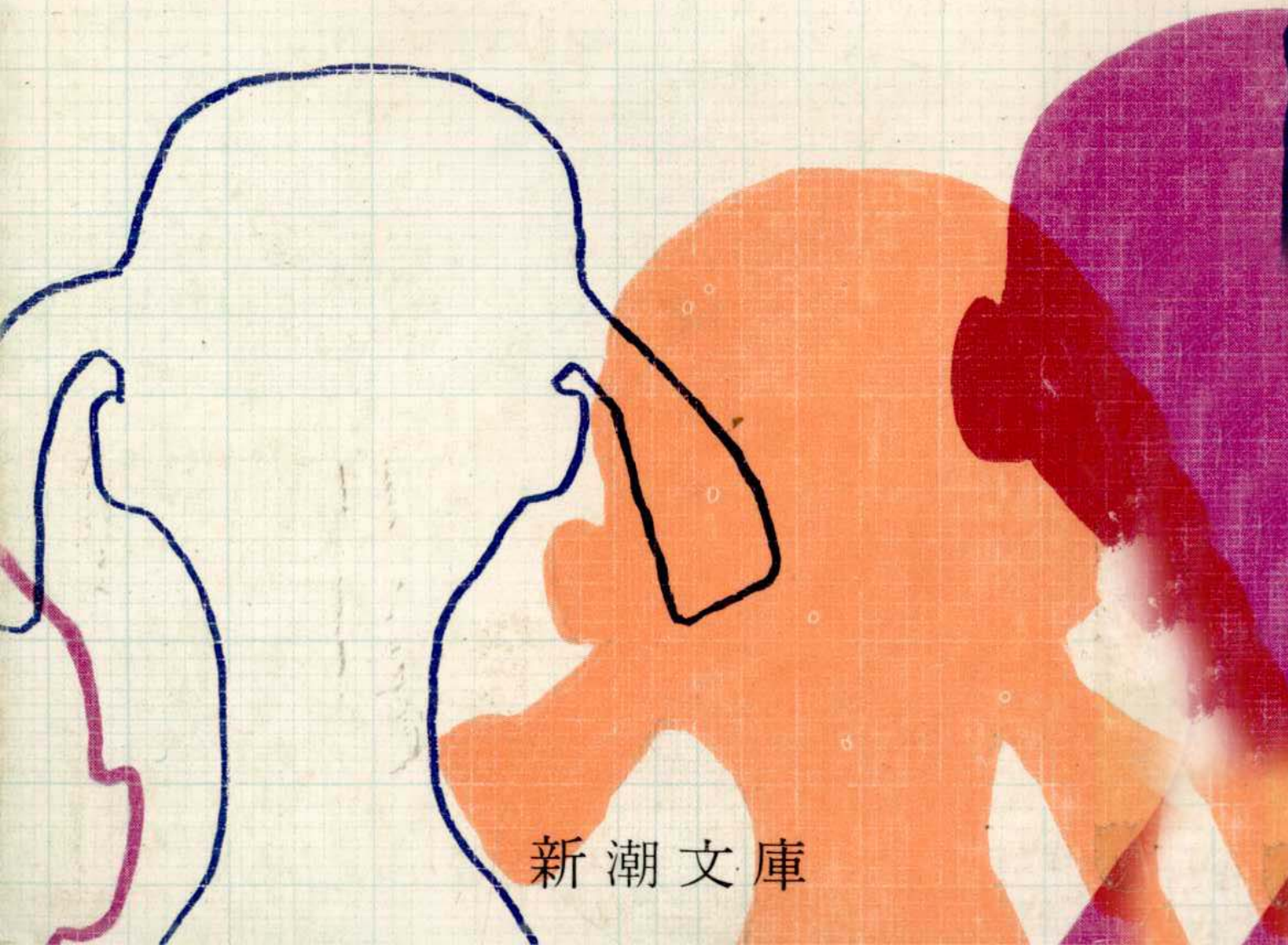
人間の壁

（上）

石川達三



新潮文庫

定価320円

新潮文庫 草150

昭和三十六年三月十五日 発行
昭和四十七年七月二十日 二十刷改版
昭和五十四年三月十日 三十三刷

著者 石川達三
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊫ 印刷・東洋印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社
© Tatsuzô Ishikawa 1961 Printed in Japan

新潮文庫

人間の壁

上巻

石川達三著

新潮社版

人間の壁

上卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

放射能雨

教室の窓は全部ひらいている。木肌の白くささくれた、古い木造校舎は三むねに分れていて、広い赤土の運動場を三方からとりかこんでいる。二十幾つの教室の、一つ一つの窓から、子供たちの調子の高い声があふれてくる。一千百人の小学校児童たちが、一せいに叫び、わめき、笑い、歌っていた。去年の春からつづいた一年間の授業は、昨日でおしまい。今日は大掃除。それがすんだら通信簿をもらって帰るだけだ。

長方形の校庭には、春の雨が降っていた。放射能をふくんだ、毒の雨だ。昨日、新潟で六千カウント、おととい、名古屋で三千カウント。それが人体に蓄積されれば、数年後には人類の危機がくるだろうという。子供たちはそれを知っている。知っているが、こわくはないのだ。危険なものは、何だって面白い。三人の男の子が、わざわざ雨の中に出てきて、天に向って口をひらき、赤い舌を出すのだった。

「おい、おれ、放射能を食ったぞ。うまくねえや。つめてえ……」

雨は高い空から、光りながら、音をたてて降っていた。その雨が、十年ののちに、この子供の骨を腐らせるかも知れないのだ。あらゆる教室の窓からあふれて来る子供たちの声は、無数の不協和音が集まって、雨の音にまじって、却って一つの調和した、潮騒のような遠いひびきとなり、

大人の社会では決して聞くことの出来ない、若い、おさない、清潔な音楽になるのだった。

一時間半もかかって大掃除が終ると、机をもとの位置にならべ、雑巾バケツをかたづけ、学級図書を整理し、さて、取りすました顔になってめいめいの机に腰をおろす。子供はなにかしら本能的に、演技を知っている。つい一分前まで、あれだけの大騒ぎをしていたのに、いまは急に厳粛な表情をつくり、大人のような分別くさい顔をしている。それが通信簿をもらうための演技だった。子供は純真なものだと、普通には思われているらしい。しかし子供を教えている先生の眼から見ると、なかなかそれだけのものではない。案外子供はうそつきで、悪知恵があり、競争心、嫉妬心、貪欲、偽瞞、阿諛、威嚇、大人のもっている悪徳は、ことごとくその萌芽をもっているのだ。

やがて担任の女教師が、紫色の風呂敷包みをもって教室にはいって来る。クラス委員の男の子が濁った声で号令をかける。敬礼、着席。

机と椅子のがたがたする音が静まるのを待ちながら、女の先生は教壇の上でにこにこと笑っている。しかしその表情にはうそがあった。風呂敷包みの中には五十六枚の通信簿がはいっている。通信簿が子供にとって、どんなに苛酷なものであるかは、先生自身が知っている。その苛酷さをまぎらすために、先生はつくり笑いをしているのだった。

一分後に、子供たちは過去一年間の自分の成績を知らされるのだ。怠けたり、いたずらをしたり、喧嘩をしたりした事の総決算をつきつけられる。そして自分の能力の限界を知らされる。国語は4、算数は3、社会も3、図画工作は4。あまり良くない成績。……その子供は、これから先の五十年の生涯を予言されたような、不気味なものを感ずるに違いない。一年に三度ずつ、そ

ういう苦痛に耐えながら、生徒たちは育って行くのだった。

出席簿の順に、先生はひとりずつ生徒の名を呼んで、通信簿を手渡す。子供たちは自分の机にもどってから、二つ折りになった白い紙をひらき、紫色のゴム印の数字に、さっと眼を通す。

成績の良い子は黙っている。成績のわるい生徒はさわぎ立てる。自分の通信簿をひろげて、頭の上で振りまわす。それが恥かしさに対する子供の抵抗だった。算数が2だということを、わざと驚いたような声で叫びたて、げらげらと笑う。子供の心にも虚無の思いがあり、絶望がある。その絶望に負けまいとして、この子は懸命にさわいでみるのだ。さわいでいる生徒の悲しみを、先生は知っている。叱るわけにはゆかない。先生はつくり笑いをしながら、黙って見まもっているのだった。

同じ通信簿であっても、生徒の年齢によって、その苛酷さには段階があった。五年生六年生の子供にとっては、自分の成績が数字で示され格付けされるということが、心の痛手であった。人格的に成長してくると、自分の成績に責任を感じてくる。この数字から逃れることが出来ないのだ。その辛さは、いわば大人になりかけている辛さだった。

一年生にはそういう辛さは無い。通信簿をもらうことも、遊びのうちだった。先生からもらうものは何でもうれしい。通信簿でさえもうれしい。一年生の受持の先生は（持ちあがり）で、四月からもう一年、この子供たちを教えることが、ほぼ予定されている。だから先生も気が楽だった。

須藤先生はもう四十ちかい年の女教師で、十七年のあいだ低学年ばかりを担任して来た人であった。その永い経歴が彼女の性格になっている。寛容な、母親のようなゆったりした態度。くり

返しくり返し言い含めるような言葉つき。おどろきもせず腹も立てない気の長さ。顔色は疲労にくすんでいて、額にしわがあった。

雨はまだ降っている。先生は家へ帰る子供たちを見送って、下駄箱のところまで行って見る。歌っている子、騒いでいる子、怒っている子。先生の腰のまわりで、子供たちが渦を巻いていた。

「先生、あたしの傘が無いの」

「無いことはないでしょう。ちゃんと探してみた？」

「探したけど無いの」

「困ったわねえ。これはだれの傘？」

「秋元さんじゃないかしら」

「これ、秋元君の傘？」と先生はたずねる。

「違う」

「じゃ、だれのですか。……あら、秋元と書いてあるじゃないの。これ、君のでしょう？」

「僕んじゃない」

「だって秋元と書いてあるのよ。君が持って来たんでしょう」

「うん」

「そんなら君の傘じゃないの」

「僕んじゃない」

「じゃ、これはだれの傘？」

「兄ちゃんの」

「兄ちゃんのを借りて来たんでしょう」
「うん。僕の、ここんとこ、骨が折れたんだ」
須藤先生は毎日子供たちと、そういう呆けた会話をしているのだった。呆けた会話のなかから、子供たちの心がむき出しになって出てくる。そういう稚ない子供の心に直接に触れることの喜びは、低学年を担任した教師だけが知っているものであった。その喜びにひかれて、彼女は十七年も勤めつづけて来たのだった。
手数のかかる五十幾人の生徒たちが、みんな出て行ってしまうまでには、十分以上もかかった。生徒の姿が全部見えなくなると、一年が終ったという、淋しいような感慨があった。しかしあと一週間たてば、あの子たちは全部二年生になって、新しい教科書と新しいノートを持って、また彼女の教室へもどってくる。その日が楽しみで、待ち遠しかった。
須藤先生は大掃除のあとの、ほこり臭い長い廊下を、職員室までもどって行った。二年まえ、三年まえに教えた生徒たちが、みな見違えるほど大きくなり、しっかりした顔つきになって、めいめいの通信簿をもって、廊下にあふれていた。
職員室のガラス戸をあけると、炭火のいぶるにおいがした。そのにおいをかぐと、何かしら、春が来たのだという気がした。右手の壁にとりつけた大きな黒板にむかって、校務主任が明日の予定を書いていた。
九時　卒業式
十一時　謝恩会、PTA合同
午後一時　職員会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一年間の反省
四月の予定について
教科書の購入について……
校務分掌について……

立ちどまって、何気なくそれを見ていると、校務主任はふり向いた。
「あ、須藤先生、ちょっと校長室へ行って下さい」
その言い方はいつもの穏やかな調子だったが、眼の色が違っていた。ただの事務的な連絡だけではない、心のとまどいが現われていた。須藤先生はかすかな不安を感じながら、職員室を横ぎって、となりの校長室の扉をノックした。
扉は向う側から開いた。そして紺色のスーツを着た志野田先生が出てきた。緊張した、不安な表情をしていた。なにかあったに違いない。
入れ違いに須藤先生は校長室へはいった。小肥りの、しわの多い顔をした熊井校長は、窓に立って煙草をすいながら、校庭の雨を見ていた。
「あの、お呼びでしたかしら」
校長はにっこりして、
「この分では、明日も雨かも知れないね」と言った。彼は茶色のスリッパをはいていた。いつも足の指の水虫に悩まされている人だった。
「そうですわね。晴れれば暖かくなるんでしょうけど……」
「そう。……先生は、今日の午後は、何か予定がありますか」

「ええ。……来年度のカリキュラムを、少し研究してみようかと思っていましたんですが、あの、（持ちあがり）させて頂けるんでしょうね」

熊井校長はあいまいな態度で、すぐには返事をしなかった。鼻の奥で唸るような声をたてながら自分の机に坐り、眼をぱちぱちさせた。それから、言いにくそうにして、

「あの、午後一時から二時までのあいだに、市の教育長のところに顔を出してくれませんか」と言った。「……さっき電話でね、先生に何か話があるそうです」

「私にですか？」と須藤先生はつぶやいた。

「志野田先生と二人です。いっしょに行ってみて下さい」

小学校の教師が直接に教育委員会に呼ばれたり教育長に呼ばれるということは、滅多にあることではない。学校教育のうえでよほど大きな落度があった時か、ないしは人事に関することだと思わなくてはならない。須藤先生はいま、自分に大きな落度があったとは思われなかった。教育長が話があるというのは、人事問題であるに違いない。

「あの、わたくしに、どんな御用なんでしょうか」と彼女は聞いてみた。

「いや、僕は何も知りません。ただ電話で、来るように伝えてくれということだけでしたからね」

校長の言い方には、なにかすっきりしないものがあった。転勤のはなしかも知れない。しかし今までの例から見ると、転勤は直接に命令のかたちで来るか、前以て校長から相談を受けるか、どちらかであった。校長は知っていたに違いない。それを自分の口からは言いたくなかったのだ。

彼女は軽く会釈しただけでその部屋を出た。ついさっき、通信簿を渡して送り出してやった子

供たちと、このままで別れることになるのかしら、と思うと、辛い気がした。そういう別れ方は、今までに何度となく経験して来ている。いくら永くても三年だった。四年生になると、みんな彼女の手から離れて行く。教師と生徒との関係は、期限付きだ。……

職員室には机がたてに三列にならんでいる。窓ぎわの一列には六年と五年の担任教師が向いあって坐り、中央の一列には四年と三年の担任者が居た。廊下にちかい列は二年と一年の担任で、大部分は女教師だった。もう五十にちかい半白の事務職員が一番隅に机をもっており、その机の上には書類と帳簿と、印判を入れた四角な木箱とが置いてある。正面には校務主任の大きな古い机があって、黄色い水仙の花を生けた花びんがのせてあった。この学校のなかで、職員室だけが大人の世界だった。ここには大人の世界のぎこちなさがあり、繁雑さがある。二十幾つの教室はすべて子供の世界だ。職員室はこの学校のなかで、孤立した、気むずかしい、不調和な場所であった。

須藤先生は校長室を出ると、六年担任の志野田先生のところへ行ってみた。三十を過ぎたばかりの、すっきりと背の高い、清潔な感じの先生だった。

彼女は自分の机の上に紫色の風呂敷をひろげ、二枚の通信簿をひらいて、じっと考えていた。

「あら、それ、どうしたんですか」と須藤先生は言った。

相手は顔をあげた、澄んだ、淋しい表情をしていた。そして「長欠よ」と言った。「……今日も来ていないの。どうしたらいいかしら」

「でも、卒業できたの？」

「いいえ、だめ。二十九日しか来ていないのよ。困るわねえ」

長期欠席のための落第が、彼女の組に二人あった。ほかのクラスにも二、三人は必ず居るのだ。ことに上級生に多い。

「先生、教育長のところへ行くんでしょう。私も呼ばれたのよ」と須藤先生は言った。「何の用だか、あなた御存じ？……転勤じゃないかしら。わたし心配だわ」

すると、志野田ふみ子と同じに六年生を担任してきた一条先生が、隣の席から怠惰な口調で言葉をはさんだ。

「そりゃ、須藤先生、違いますよ。転勤じゃないですなあ」

そう言いながら、彼は椅子の背にだらしなく上半身を反らせ、くわえ煙草で、うす笑いをもらしていた。彼の言葉を聞くと、志野田ふみ子は理由のわからない反感を覚えるのだった。小肥りのつややかな頰、きれいに剃ったゆたかなあご、役者にもなれそうな整った顔と、金ぶちの眼鏡、二重まぶたの、他人を軽蔑したような眼つき。いなかの小学校の先生に、こんな美貌は必要ではないのだ。その美男子ぶりを鼻にかけたような態度が、志野田ふみ子には我慢がならない。

「転勤でなければ、何ですの？」

「竹越君にきいてごらん。彼が説明してくれますよ」

「何のことを言ってらっしゃるの？」

「つまりね、あんた、組合の支部から通知が来たのを見なかったでしょう」

「見ませんわ。何ですの？」

一条太郎はわざとらしく小さいあくびをした。それから煙草の灰をはたき、ちらと女教員の顔を見て、

「まあ、僕の想像ですがね……」と言った。「正確なところは行ってみれば解るでしょうが、要するに先生は、退職を勧告されるんですよ。多分ね。……だから、行くまえにちょっと竹越先生と相談した方がいいだろうと僕は思うな。分会長が知らなかったということでは困るだろうからなあ」

二人の女教師は思わず顔を見合せた。須藤先生のしわの多い顔は、哀願するような表情になっていた。ついさっきまで彼女は、持ちあがりの二年生の子供のために、来年一年間の教育課程（カリキュラム）を今から研究しておこうと思っていたのだった。ここで不意に退職させられるとすれば、明日から私は一体、何をして生きて行けばいいのか。……彼女の眼に涙がうかんで来た。

志野田ふみ子は急いで眼をそらすと、大勢の教師たちのあいだから、教職員組合分会長の竹越先生を探した。しかし彼女はまだ疑っていた。こんなに急に退職を迫られるような理由は、自分には無いと思っていた。

彼女は教職員組合のことは、よく知らなかったし、興味ももってはいなかった。給料が上がるのは有難いけれども、そのために教室をはなれてデモ行進をやったり、県庁や市役所へ押しかけたりするような事は、好きでなかった。それだけのひまがあるならば、その時間で自分の勉強をするのが教師の任務だと思っていた。

しかしいま突然に、退職を迫られるかも知れないという立場に立たされると、どうしていいか解らなかった。職員室のなかには三十人ばかりの先生たちがいて、書類を作ったり雑談をしたり煙草をすったりしていた。さっきまではみんな（同僚）であった。いまそれが急に、赤の他人に

見えた。彼女とは縁の遠い、冷たい、赤の他人のように思われた。

彼女は立ちあがり、大勢の机のあいだを縫って、三年生担任の竹越先生のところへ歩いて行った。

竹越分会長は一年じゅう袖口のすり切れた紺色の背広服を着て、黒のネクタイをしめていた。やせて小柄な、風采のあがらない先生である。子供が五人あって、長女は高校にかよっている。その子供たちを養い育てるだけで、彼の生活はせい一杯だった。

彼は職員室の黒板に向って右手を高く伸ばし、きれいな正確な文字を書いた。

緊急職場集会

本日十二時半より約三十分。本校音楽教室において開催。なるべく全員出席願います。（それまでに昼食を終るよう都合をつけて下さい）以上。

生徒が早く帰ったので、給食はなかった。先生たちはめいめいの弁当をひらき、いつもよりも静かに食事をしていた。その静かな態度が、退職を迫られている二人の女教師に対する同情のようでもあり、かかりあいになりたくないために息を殺しているようでもあった。放射能をふくんだ雨は絶え間もなく降りつづき、校庭に水たまりができていた。校庭のむこうに、遠く海がみえる。灰色にけぶって、いつもよりも海が狭く見えた。

食事が終ったころを見はからって、竹越先生は立ちあがって声をかけた。

「あの、皆さん、おすみになりましたら、音楽教室の方へ行って下さい。一時から私は支部の連絡会に出る予定になっていますから、それまでに終るようにしたいと思います」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com